

Book Review 15-23 時代小説 #銀漢の賦/#散り椿

『#銀漢の賦/#散り椿』（葉室麟著）を読んでみた。著者は50歳から創作を始めて4年後に文壇デビュー。本書で松本清張賞、『蝸ノ記』で直木賞を受賞。

『#銀漢の賦』は「志」をもって生きた三人の男の物語である。三人は幼なじみであった。江戸寛政期、西國小藩の郡方Kは水害で悩む地で堤防完成に命を懸け、名家老と謳われたMは藩政の刷新に苦悩し、農民のJは過酷な年貢を減らすために一揆の首謀者となって農民を組織し年貢を軽減させるが、為政者に捕まり若くして死罪となる。この三人の織り成す人生が、時間を行ったり来たりしながら、綴られてゆく。

後半のクライマックスは、藩主を幕閣にするべく奔走する側用人がKにMの暗殺を持ちかける。Mは老中に藩の腐敗した内情を知らすため脱藩への手はずを整える。Kは脱藩を手伝う決心をする。国を離れば、二度と戻れない命がけの旅となる。その動きを察知した側用人が刺客を送り込む。果たしてMは無事に江戸に到達できるのか。

タイトルになっている「銀漢」とは天の川のことだそう。本書は『風の峠〜銀漢の賦〜』と題してNHKで2015年に中村雅俊、柴田恭兵主演でテレビドラマ化された。

『#散り椿』に登場する扇野藩は架空の藩であるが、他の作品にも登場し、「扇野藩シリーズ」とも呼ばれているそう。享保15年、かつて故郷でその強さをたたえられた剣豪の男は、藩の不正を糾そうとして失敗し、放逐された過去を持っている。浪人となった彼に連れ添い続けた妻が、あるとき病に倒れてしまう。妻に最後の願いを託された彼は、それを受けて故郷へと戻り、不正事件の真相を突き止めるべく奔走する。・・・藩を追われたSが自分を散った椿に例える。一般的な椿は花の形のまま落花するが、はらはらと花卉ごとに散る椿を「散り椿」と称する。

本作は2018年岡田准一主演で映画化（東宝）されている。

藤沢周平の再来と言われる著者の時代小説は、読んでいて清々しい。登場人物には一本筋が通っており、生き方にブレがない。